兵庫県病院協会

会　報

● 発行 ●
兵庫県病院協会
〒651-0086
神戸市中央区磯上通
6丁目1番11号
兵庫県医師会館7F
TEL (078) 251−3030
FAX (078) 251−3011
会報編集委員会
印刷　株式会社 七旺社

目　次

― 巻頭言 ―

ネットによる論文監視時代の到来―研究不正騒動の端緒―
兵庫県病院協会副会長　兵庫県立尼崎病院・塚口病院・病院長　藤原　久義 …… 3

― 随　筆 ―

治療と癒し
兵庫県病院協会理事　芦屋市立芦屋病院・病院長　小関　萬里 …… 4

神戸掖済会病院は今年設立100周年を迎えます
兵庫県病院協会理事　(社) 日本海員掖済会神戸掖済会病院・病院長　島津　敬 …… 5

＝ 新役員就任のご挨拶 ＝

理　事　特定医療法人社団順心会順心病院・理事長　栗原　英治 …… 6
理　事　西脇市立西脇病院・病院長　岩井　正秀 …… 7
理　事　公立八鹿病院・病院長　谷風　三郎 …… 7

＝ 会員病院紹介 ＝

北播磨総合医療センター・病院長　横野　浩一 …… 8
医療法人朗源会　大隈病院・病院長　大隈　健英 …… 11

＝ 編集後記 ＝

兵庫県病院協会理事・会報編集委員
兵庫県立こども病院・病院長　長嶋　達也 …… 14

〈表紙の写真〉

みなとこうべ海上花火大会（神戸市）

港町神戸の夏の風物詩として定着した「みなとこうべ海上花火大会」。今年は八月二日に開催され、四十四回目となります。約一万発の花火が用意され、海上で打ち上げられる色とりどりの花火が神戸の夜空を彩ります。メリケンパークやポートアイランドからも鑑賞することができ、浴衣姿の若者や家族連れらでにぎわいます。

日本の花火の歴史は江戸時代に徳川家康がポルトガル人の宣教師によって、中国製の花火を見たことが始まりといわれています。その後、日本でも花火の製造が始まりました。一七一七年に水神祭りの献上物として花火が打ち上げられたのが、現在の隅田川の花火大会の始まりです。

七月に入ると関西各地でも花火大会が開催されます。夏の夜空を彩る幻想的な風景、からだに響くド～ンという音…。日本の夏の風物詩のひとつと言えます。

巻頭言

ネットによる論文監視時代の到来
―研究不正騒動の端緒―

兵庫県病院協会　副会長
兵庫県立尼崎病院・
塚口病院
病院長　藤原　久義

最近の医学の大きな話題の一つは「STAP細胞」や「バルサルタン臨床研究」等の研究不正騒動である。私は以前、循環器内科の教授として、心筋細胞の再生医学や臨床研究を主要テーマとしており、これらの問題は他人事ではない。特徴的なことはこれらの騒動がマスコミを利用した大げさな発表とネットによる告発から始まったということである。共に最近のメディア革命の波に乗ったものである。

◆「STAP細胞」の初回発表と報道に違和感

2014年１月29日著者らは神戸の理化研での記者会見で「STAP細胞」の発表を行った。その詳細は翌日の１月30日に自然科学領域のトップジャーナルであるNATUREに掲載され、世界中のマスコミは生物学の常識を覆す大発見ともてはやした。タイトルは「体細胞の分化状態の記憶を消去し初期化する原理を発見―細胞外刺激による細胞ストレスが高効率に万能細胞（STAP細胞）を誘導―」である。

内容について“すごいな”と思うとともに著者らの発表の仕方やマスコミに対し用意された資料の周到さにやりすぎではないかという感もいだいた。なぜなら、自然科学の研究発表には自然淘汰され将来消えていくものの方がはるかに多く、単なる追試にすら数年を要し、複数の研究者のさまざまな角度からの検討により、自然科学全体の中に占める発見の重要性が明らかになるのは10年先だからである。今回、最初の発表にもかかわらず、すでに確立した成果であるかのような発表の仕方、iPS細胞に対する知識不足、マスコミの大騒ぎに、早すぎるとして、違和感を持った研究者は多かったと思う。

◆ネットによる告発

発表直後の２月上旬にはネット上で筆頭著者の過去の学位論文からの図の使いまわしや切り貼り等の不正の告発が多数のサイトやブログからネット上に一斉に流れた。それに伴い理化研でも調査委員会が立ち上がり、2014年３月14日＆４月１日、２項目については捏造、改竄や故意による研究不正に該当するとして論文撤回を要請した。一方、STAP細胞については「一つの仮説として予断のない状況から検証する」とした。また、追試が成功しないという発表が相次いでなされ、主要著者の一人から「STAP細胞」の存在そのものについて疑義が出された。それに対し、筆頭著者らは故意や意図的ではなく、単純ミスで差し替え用の修正した図をすでに雑誌社に送っている。「STAP細胞」は存在し、論文の根幹は揺るがない、論文は撤回しないとした（４月９日の記者会見。しかし６月上旬には論文撤回に同意と報道）。マスコミは初期の大賛辞から一転し、プライベートなことまでの批判を含め、日本国中、大騒ぎになっている。

◆ネット上での論文不正監視時代の到来

これまでは第三者が論文内容に間違いがあると気づいても多くはオープンにならず、なっても著者と雑誌社とのやり取りで差し替え修正することで済んでいた（一般的には小さな地味な扱い）。指摘した側が意図的ではないかと推測しても、著者らが意図的ではなく、単なる不注意であるとし、かつ論文の本質に影響がないと主張すれば多くの場合、OKであった。そもそも、間違いが意図的か否か、論文の本質に影響するか否か、さらにうっかりミスとして差し替えられた著者らの新しいデータが本物か否かの客観的判断は難しい。そのため、論文撤回まで行くことはまれであった。

しかし最近、状況が変わった。科学論文の内容の間違いや不正を専門的にチェックし、それをネット上に情報公開するボランティア組織が世界中にいくつも存在するようになった。それらが今回のように実際に事態を動かす力を持つようになったのはごく最近である。さらに今は職業として代価を取りながら“剽窃や盗作の疑いをクリアに―学術成果のオリジナリティをチェックする―”をうたい文句にして商売をする会社も出てきた。また、間違いをチェックする有料のソフトも開発されている。

そのようなグループが実際に論文チェックをすると過去の多くの論文に間違いすなわち使い回しや反転・左右の入れ替え・追加・切り貼り・継ぎ足し、文章のコピー等が意外に多いことが分かってきた。このような状況の変化はネットの発達で以下のことが可能になったためである。

1. 告発者は以前のように図書館で長時間かけて論文検索する必要がなく、ネットを利用することにより、どこででも世界中の論文内容の検索がキーワードや著者名を利用して、自由に行うことが可能になった。インターネットで得られる論文の画像もオリジナルと同程度に鮮明になった。すなわち、告発対象者の過去の論文全体の系統的チェックや別の著者との比較が簡単に行えるようになった。
2. 発見した間違いの情報公開がフェイスブック等を利用してネット上で行うことが可能になった。さらにその指摘内容に興味を持つ別の人間がネット上で参加し、追跡が詳細かつ拡大するようになった。
3. ネット上では告発者の大部分は匿名であるため、発言に責任を取る必要がなく、告発された著者らの弁明もないままに、不正・捏造・改竄という刺激的言葉が横行し、それが第三者にとっては面白い。すなわち告発者と告発された著者らの間に公正なディスカッションの場を保証する座長もおらず、裁判にある時効等のルールもない。

◆ネット監視時代に対する対応と論文不正の予防

マスコミを利用した誇張した発表の抑制と共にこれからは、昔のような無邪気な“いい加減さ”や“うっかりミス”が許されない時代になっていることを自覚し、上記の専門機関や専用ソフトを逆に利用して細かなチェックを受けた後で論文を雑誌社に送る必要がある。すなわち時代が変わったのである。

もちろんこの対策は“うっかりミス”の予防であって、作為的実験操作やデータ操作等の悪質な問題は別である。

随　筆

治療と癒し

兵庫県病院協会　理事
芦屋市立芦屋病院
病院長　小関　萬里

2025年問題へと繋がるこの度の診療報酬改定は、各医療機関に多大な影響を及ぼしています。病床機能や在宅医療提供体制の見直しの必要性は、これまで診療体制のあり方を左右し、さらに今後、医療特区や総合特区などへのグローバル・ヘルス・ケア会社が参加することになれば、医療圏という概念すらも大幅に変わってくる可能性が考えられる。このような医療情勢の急激な変化の下で、医療機関が正しく進路を見極めることは、はなはだ困難な現状であります。

「病院では、私は全く存在感がなかった。」という関節リウマチで膝の手術を受けた患者さんの言葉が、先日読んだ雑誌の記事に載っていました。「そこは、立派な病院で、職員の対応も申し分なく、手術後はゴルフもできるくらいに良くなったのだけれど、何だか病院が冷たく感じられてしかたが

なかった。」ということのようです。最近、医療では病気を治療（cure）するだけでなく、病気の人への癒し（healing）も必要であるということがしばしば話題になっています。治療の進歩により平均寿命が延びていますが、それは病気が治癒した事によるという以外に、治療により病状が慢性化する機会が増えてきていることによるとも考えられます。このように病状が長くなればなるほど、病気に対する治療だけではなく、同時に病気になっている人の心悩みや苦悩に対しても働きかけが必要となってくる事になります。ヒポクラテスにより、医学は原始的な迷信や呪術から切り離され、科学的、実証的なものとなり、進歩してきました。しかし、病状が慢性化するような現代では、ヒポクラテス流による「治療」と同時に、アスクレピオス流による「癒し」の双方が必要とされているのではないでしょうか。このような治療と癒しの双方の働きにより、はじめて病気の人は自分の存在感を見つけることができるのではないかと思っています。１匹のヘビ（治療）が杖に巻きついているアスクレピオスの杖を多くの医療機関はシンボルとしてきましたが、カデュケウスの杖に巻きついている２匹のヘビ（治療と癒し）を敢えてシンボルにする医療者も見られています。治療と癒しについて頭を巡らせたり、ヒポクラテスの誓を思い出したりすることが、どれほど病院が抱えている問題の解決に役に立つかは大いに疑問ですが、久しぶりに静かな時間が過ごせました。

神戸掖済会病院は今年設立100周年を迎えます

兵庫県病院協会　理事
（社）日本海員掖済会
神戸掖済会病院
病院長　島津　敬

当院は設立以来100年が経過しました。古ければよいというものではありませんが、当院は大正３年に神戸市で誕生して以来、本年の秋で100周年を迎えます。

神戸掖済会病院は一般社団法人（非営利型）日本海員掖済会に属していますが、まず日本海員掖済会の歴史から始めましょう。明治13年に前島密ほかの官民有志の尽力により海員の福利厚生を目的とした海員掖濟會が設立されました。海に四方を囲まれた我が国の海運の振興を図るためには、それを支える海員の健康を守ることが必須であったのです。したがって、海員掖濟會の事業内容は船員を対象とした宿泊所の提供、職業紹介、海員の養成、表彰などと共に海員を対象とした診療所・病院の設立など多種の範囲に及んでいました。そして、明治20年には日本海員掖濟會という、現在の名称に改められています。

現在、本部を東京都築地に置き、北は北海道小樽から南は九州長崎まで全国に８か所の病院と６か所の診療所、２か所の介護老人保健施設及び看護専門学校１校を運営しています。ちなみに病院や診療所は当然のことながらいずれもいわゆる港町に存在しています。

神戸掖済会病院の正確な開院日は伝えられてはおりませんが、大正３年11月に竣工したことが伝えられています。前島密氏の原稿によると神戸港における海員の診療は明治33年から契約病院により既になされていましたが、神戸港の発展に伴い本会に専属の海員病院が必要となり、大正２年に購入した神戸市東川崎町１丁目の654坪の土

地に病院建設を開始し、大正３年11月に竣工したのが神戸掖済会病院の始まりです。その後、昭和６年３月に神戸市生田区中山手通６丁目に移転し、さらに平成13年３月に現在の住所である、神戸市垂水区学が丘１丁目に３回目の移転を行い現在に至っています。中山手通の病院は昭和20年６月の空襲の際には百数十発の焼夷弾の直撃を受けたのですが、全職員の必死の消火作業によりきわめて軽微な損害に食い止めることができたと伝えられています。また、この地では平成７年の阪神大震災にも被災していますが病院は倒壊することなく、震災当日から診療を再開して地域の医療を継続することができました。診療の対象者は、設立当初の目的である船員の数は著しく減っており、最近では地域に住んでおられる方が大半であり、時代の変遷を実感します。医療・介護の未来については厳しい予想が多いですが、従業員の方々のご協力を得てこれまでの100年間の歴史に新しい歴史を付け加え、創造してゆきたいと考えています。なお、本年秋には記念の小宴を開催する予定にしておりますのでご参加いただければ幸いです。

新役員就任のご挨拶

理事
特定医療法人社団順心会
順心病院
理事長　栗原　英治

この度、松浦梅春前理事の後任として兵庫県病院協会の理事に就任させていただきました。兵庫県病院協力の理事として責務を果たし、少しでもお役に立てるよう頑張ってまいりたいと思います。

近年人口の減少と高齢化が現実の社会問題となってきていますが、こうした状況の中で、日本の医療、そして私ども病院は多くの問題を抱えながらその役割と機能の面で大きな変化に向かっております。そうした中、現在、病院機能の分化と連携そして地域のつながりが進められていますが、こうした機能をより進め、地域住民の方が安心して受けられる医療体制を作ることが大切であると考えています。微力ではございますが、兵庫県の病院の発展のために少しでも貢献できればと願っております。宜しくご指導賜りますようお願いいたします。

理事

西脇市立西脇病院
病院長　岩井　正秀

この度、大洞慶郎前副会長の後任として兵庫県病院協会理事に就任させて頂きました西脇市立西脇病院の岩井正秀と申します。本年４月に病院長に就任したところであり、まだまだ未熟者ですが、なにとぞよろしくお願いいたします。

西脇市は北播磨地域の中でも北の方で、明石市の北約40kmに位置します。当院もまた他の多くの地域の自治体病院と同様に、病院経営をはじめ、医師不足、看護師不足等の多くの難題を抱えながら、スタッフは日々の診療に努めています。

今後、医療を取り巻く状況はさらに厳しくなると思われ、医師会や地域住民と共により良い強固な体制を構築し、地域に根ざした病院となることが必要と考えています。

誠に微力ではありますが兵庫県の地域医療に貢献し、また兵庫県病院協会の責務を果たすべく努力してゆく所存ですので、皆様のご指導ご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。

理事

公立八鹿病院
病院長　谷風　三郎

このたび兵庫県病院協会の理事にご推薦いただきまことに光栄に存じております。これまで兵庫県や愛知県の小児専門病院において勤務医一筋で現場におりましたが、このたび縁あって但馬の地にあります公立八鹿病院院長として赴任し、前院長の宮野からそのまま引き継いだかたちで理事をつとめさせていただくこととなりました。高齢化が急速に進んでいる僻地にあります多くの公立総合病院では医師不足や経営的な面で大変苦労を強いられている現状で、特に高齢化現象の進んでおります当八鹿病院におきまして、まさに大変な状況を目の当たりにしておりますが、地域の患者さんの健康維持のため少しでもお役にたてればと考え、病院の改善、改革に努めております。病院協会を通じてもたらされます医療行政からの情報をはじめ感染症情報に至るまで、各分野からの情報をいただき、この10年の間に医療提供のありかたがかなり見直されると言われておりますが、その改革に備えたいと考えております。また同時に大変微力ではありますが、病院連携を基本として何らかの形で、病院協会の維持発展のため、お役にたちたいと思っております。病院協会の諸先輩がたのお力もおかりし、会員のみなさまのご指導、ご支援をいただきますれば幸甚に存じます。

会員病院紹介

北播磨総合医療センター

病院長　**横野　浩一**

◆大学医学部との連携で開院

北播磨総合医療センターは、神戸大学医学部との連携により、三木市民病院と小野市民病院を統合し、平成25年10月１日に開院しました。建設の計画段階から大学と自治体が連携して事業を行うことは、全国的にも例のない先駆的な取組です。

医療センターの規模は、許可病床数は450床で、開院時は342床（一般病棟287床、ICU･HCU30床、緩和ケア病棟20床、人間ドック５床）でスタートしました。７階の２病棟は段階的にオープンしていく予定で、今年６月には７階西病棟（48床）を開設しました。

また、現在の診療科は、内科系18診療科、外科系15診療科の合計33診療科となっています。充実した診療科で総合的な医療機能を発揮し、４疾病（がん、脳卒中、急性心筋梗塞、糖尿病）対策に加え、救急医療、小児医療、周産期医療を充実・強化していきます。

医療機器では、北播磨圏域では初となるPET-CTのほか、リニアック、MRI等の最新の医療機器を導入し、高度な医療を提供しています。

また、働きやすい環境整備として、24時間体制の院内保育所やワンルームマンションタイプの職員宿舎を配置しています。

◆理想のマグネットホスピタルを実現

北播磨総合医療センターの基本理念は、「患者と医療人を魅きつけるマグネットホスピタルを地域とともに築き、理想の医療を提供します。」としています。

マグネットホスピタルとは、患者にとって医療機能が充実し、安心して医療を受けられること、また、医師、技師、看護師などの医療人にとって人材育成能力が高く、やりがいがあり、働き続けられる環境であるなど、患者にとっても、医療人にとっても魅力ある病院を意味しています。

さらに、この基本理念を実現するため、

1　安全で、より質の高い医療を提供する。
2　患者と医療人のパートナーシップを図り、信頼される病院をめざす。
3　地域の医療機関と連携を深め、地域で完結する医療を提供する。
4　高い技術と誇りを持った医療人を育てる。
5　病院を維持、継続できる安定した経営基盤を確立する。

という、５つの基本方針を掲げています。

◆主な医療機能

・がん対策

放射線診断科、放射線治療科、緩和ケア病棟など、迅速で適切な診断、集学的治療（手術、化学療法、放射線治療など）から緩和ケアに至るまで、がんに対する一連の医療提供体制を整えています。

・脳卒中対策

脳神経外科と神経内科との共同により、脳卒中等の脳血管疾患に対応できる医療を提供します。将来的には、ストロークケアユニット（SCU）の開設を予定しています。

・急性心筋梗塞対策

北播磨圏域における急性心筋梗塞の拠点病院である三木市民病院の医療機能を引き継ぎ、循環器内科と心臓血管外科が連携して、急性心筋梗塞をはじめとする循環器系疾患に対応します。

・糖尿病対策

急性増悪時の治療並びに教育入院や集中的な治療を提供している小野市民病院の医療機能を引き継ぎ、検診事業の充実、患者教育の強化（集団・個別指導）により、糖尿病の早期発見、進行予防、急性増悪時治療の体制を整えています。

・救急医療対策

救急科を設置し、各診療科の応援体制を構築しながら、ER救急体制を整えます。

また、救急受け入れ態勢の充実、強化を図るため、屋上にヘリポートを配置しています。

・小児医療対策

北播磨圏域における小児医療の拠点病院である小野市民病院の医療機能をさらに拡充し、地域の医療機関や県立こども病院、加古川市民病院と連携を図りながら、受入体制を整えています。

・周産期医療対策

周産期医療に対するニーズに応えるため、常勤の産科医を平成26年１月に配置します。リスクの高い妊産婦・新生児については、県立こども病院、加古川市民病院と連携を図りながら、安心して出産できる体制を整えています。

◆明石大橋を遠望

本館棟は、地上７階建て、塔屋２階、屋上ヘリポートを備えています。

１、２階に外来部門、放射線部門、検査部門、リハビリ部門、薬剤部門、管理部門等を配置し、３階は手術部門、集中治療室、緩和ケア病棟、４階から７階は一般病棟となっています。

また、塔屋階には展望ホールを設け、南面から明石大橋や淡路島が遠望でき、寛ぎの空間を提供しています。

PET-CT

リニアック

◆最後に

関係各位のご理解とご支援を得て、北播磨総合医療センターが､昨年10月に開設をいたしました。

医療に携わる者として、最新の設備を備えた新病院で、安全で、より質の高い医療をご提供できる機会に恵まれ、深い喜びを感じております。

本院は、神戸大学からの支援を受けながら、がん・脳卒中・心筋梗塞・糖尿病の４疾病対策に加え、救急・小児・周産期医療の充実と強化を図るとともに、従来の市民病院の特質も継続していきます。また、北播磨地区をはじめとした地域の医療機関との連携をさらに深め、住民の皆様に安心して受診いただける医療体制を築いていきます。

病　院　の　概　要

許可病床：450床
（一般病棟385床、ICU・HCU30床、緩和ケア病棟20床、救急病棟10床、人間ドック５床）
構　　造：RC造一部SRC造、免震構造、地上７階、塔屋２階
敷地面積：85,415.00㎡
建築面積：13,624.84㎡
延床面積：42,719. 20㎡
工　　期：平成23年10月～ 25年8月

子ども病棟のアート

医療法人朗源会

大隈病院

病院長　**大隈　健英**

◆はじめに

平成24年６月から、尼崎市杭瀬で60年の伝統を持つ大隈病院の院長職を引き継ぐことになり、３年生院長として病院運営に今ひしひしと、責任の重大さを実感しております。

祖父の時代から現在まで、この地に医療施設を構え長きにわたり医療を提供できたことは、これも一重に病院を取り巻く多くの住民の方々、当病院の理念・伝統を脈々と受け継いで支えてきた病院の諸先輩方々のご協力・ご支援がなくしては成り立たなかった事であり、深く感謝すると共に心より御礼を申し上げます。

当医療法人は「病気を治すだけでなく心も癒す」を理念として平成24年８月に更なる救急・地域医療を展開すべく園田地区におおくまセントラル病院を増築増床致しました。それに伴い当院は後方病院として引き続き一般外来診療を行い、地域医療機能の維持に努めております。

また、おおくまセントラル病院へ循環器内科・外科など一部診療科の移動に伴い、患者様・利用者さまのご不便が起こらないよう密に連携し、病院間はシャトルバスの運行も行っております。

更に快適な院内感染を極力防止できる医療環境、高齢者や障害者の患者さんにも優しい・患者さんのプライバシーを守る療養環境、また地域の住民の方々に広く開かれた病院を目指しています。

今まで以上に、患者さんから信頼される、患者さんの視点に立った、患者さんに「優しい」診療活動を、全職員が協力して行えるよう病院運営の舵取りに全力を投入しております。

基　本　方　針

一、地域の人々に信頼される病院になります。
一、高度の医療機能をもつ　かかり付け病院になります。
一、病気を治すだけでなく、病める人の心も癒す病院になります。
一、職員が勉強し、朗らかでやりがいのある病院になります。

病　院　沿　革

昭和16年２月	大隈　義朗　大阪市に大隈外科開設
昭和19年９月	空襲により医院焼失
昭和26年３月	尼崎市に大隈外科医院を再開
昭和47年１月	大隈　義彦　医院を継承
昭和55年12月	大隈病院に改築（50床）
昭和60年12月	医療法人朗源会　設立
昭和62年11月	大隈病院（おおくま病院）増改築（99床）
平成６年11月	大隈病院　増改築（151床）
平成８年１月	おおくま訪問看護ステーション開設
平成10年２月	社会福祉法人 ほがらか会　設立
平成10年５月	おおくまクリニック　開設
平成11年７月	おおくまリハビリテーション病院開設（150床）
平成16年６月	介護老人保健施設 おおくま開設（100床）
平成20年１月	朗源会ウェルフェアグループ（RWG）本部設立
平成21年３月	大隈病院附属歯科クリニック開設
平成21年４月	おおくまクリニックを医療法人すこやか会へ移管
平成24年６月	大隈病院 病床数変更（136床）

平成24年８月　おおくまリハビリテーション病院増改築（240床）
病院名をおおくまセントラル病院に改名
平成25年５月　岩﨑クリニックを医療法人朗源会として開設

病　院　概　要

所 在 地：兵庫県尼崎市杭瀬本町２丁目17番13号
理 事 長：大隈　義彦
院　　長：大隈　健英
開　　設：昭和16年２月
診療科目：内科・循環器内科・消化器内科・呼吸器内科・外科・整形外科・心臓血管外科・消化器外科・乳腺外科・肛門外科・放射線科・麻酔科・泌尿器科・リハビリテーション科・ペインクリニック外科
許可病床：136床（一般40床・療養96床）
救　　急：救急告知病院・第二次救急輪番制参画
外国人救急システム参画・救急救命士研修病院参画
健　　診：人間ドック・特定健診・一般健診・協会けんぽ・企業健診受託
診療時間：午前外来診療＝９時00分～ 12時00分（月～土）
午後外来診療＝14時30分～ 17時00分（月～金）
救急患者は随時対応
休 診 日：土曜午後・日曜日・祝日・年末年始（12/30 ～１/３）
企業活動：労働衛生士コンサルタント・産業医

病　院　の　特　徴

昭和26年３月先々代から半世紀以上に渡り阪神南地区を中心に、杭瀬のこの地で地域医療に貢献して参りました。

グループ内におおくまセントラル病院が新設しましたが、現在でも当院では急性期から慢性期疾患の対応を行っております。また在宅療養支援病院として、自宅で安心した医療や看護を受けられるように24時間対応を整備し、在宅医療の推進を図っています。

その間、当院は増改築を繰り返し、現在は136床（急性期36床・亜急性期４床・療養96床）の病床を抱え、急性期では内科・外科・整形外科を中心に診療を行い、療養病床では人工呼吸器装着患者の受け入れも積極的に行っております。またクリティカルパスを用いて糖尿病の血糖コントロール目的や、内視鏡的消化管ポリープ切除術の短期入院も行っております。

また院内のスタッフが連携し、一人の患者様の為にチーム医療を実践しています。

近年は下肢静脈瘤の日帰り手術や、再生医療臨床研究を行いながら新しい取り組みにも積極的に取り組んでおります。

我々地域医療を謳う以上、それが絵に描いた餅ではなく本気で地域に貢献をしなければ存在価値がないのも同然で、そのためにはまず地域の開業医の先生方のお助けになる病院でなければならないと考えています。すなわち先生方がお困りのときはお待たせすることなく患者を引き受け、病院機能を利用していただけるよう平素よりMSWや外来看護師が迅速に対応するよう努めております。

また平成25年度には法人グループに近隣の透析クリニックも新たに加わり、今後は受け入れに難渋していた入院透析にも対応していきたいと考えています。

◆診療部

内科・外科・整形外科を常勤医師で日々の診療を行っております。また非常勤医師による循環器内科・泌尿器科・呼吸器内科・麻酔科（ペインクリニック）も１回／週行っております。

下肢静脈瘤外来は毎週月曜日の午後に設け、毎週火曜日は日帰り静脈瘤手術も行っております。

平成25年度には厚生労働省より再生医療の認可を頂き、現在も臨床研究「重症末梢動脈疾患に対する自家間葉系幹細胞を用いた血管再生」を行っております。

◆看護部

・一般病床＝40床
「10対１基本料内、４床亜急性期入院医療管理料１」
「急性期看護補助体制加算届出（25対１）」
・療養病床＝96床
「療養病棟20対１基本料」
「在宅復帰機能強化加算届出」

急性期・慢性期に係わらず、広い視野をもった看護を実践しています。また職場環境にも配慮し、お互いを尊重できる職場を築き、離職率の低下にも勤めています。

◆リハビリテーション科

・心大血管疾患リハビリテーション料（Ⅱ）届出
・脳血管疾患等リハビリテーション料（Ⅰ）届出
・運動器リハビリテーション料（Ⅰ）届出
・呼吸器リハビリテーション料（Ⅰ）届出

上記のリハビリテーションに加え、平成25年度より言語聴覚士の常勤配置により嚥下困難症例に対し、積極的な口腔内ケアと嚥下リハビリテーションを実施しています。実施にあたり嚥下造影（VF）を行い、正確な嚥下機能と該当する食物形態を評価し、誤嚥の予防や経口摂取へのサポートに努めています。

また専門スタッフによる段階的なプログラムと、患者一人ひとりに合わせた高度できめ細かなリハビリテーションで社会復帰・自宅復帰の支援を行っております。

◆診療技術部

・診療録管理体制加算届出
・CT撮影及びMRI撮影届出
・大腸CT撮影加算届出

◆薬剤科

・薬剤管理指導料届出
・後発医薬品使用体制加算届出

◆栄養科

・入院時食事療養（Ⅰ）届出

外来・入院を問わず疾患ごとの栄養指導を密に行い、また糖尿病教室の開催（１回／月）や、NST委員会等でチーム医療に参画しています。

◆検査科

・検体検査管理加算（Ⅱ）届出
・輸血管理料Ⅱ届出

◆地域連携科

・患者サポート体制充実加算届出
・退院調整加算届出

入退院の段取りにとどまらず、転院や退院後の生活環境保持等、きめ細かいサポートを行っております。

◆まとめ

平成24年度より院長・経営管理部長・看護部長の幹部人事が一新し、それに伴い各部署も若返り人事を行いました。医療界は未だ医師中心の封建的な風潮が抜け切れないところが存在しています。しかしこれからの医療は一人の患者のため、各部署のスタッフの英知を持ち出し、また地域の開業医先生、訪問看護師、ケアマネジャー方々も巻き込み、病院の垣根を越えたチーム医療が必要と考えます。

我々スタッフ一同は歴史あるこの病院の、のれんに頼ることなく今後も責務を果たして参ります。

編集後記

二十四節季の小暑（７月７日頃）は梅雨が明け本格的な暑さが始まる季節ですが、今年は近づきつつある超巨大台風の豪雨のなかで、サッカーワールドカップ決勝進出チーム決定のニュースが流れています。

藤原先生の巻頭言「ネットによる論文監視時代の到来」に取り上げられたスタップ細胞をめぐる騒ぎは、iPS細胞の臨床研究まで巻き込んでとどまるところを知らない状態です。こども病院の移転先での出来事であるだけに、その成り行きが気になります。

小関先生の随筆では、「カデュケウスの杖」の二匹の蛇の一つが「癒し」を意味しているという解釈を教えていただきました。私たちの仕事の本質は癒すことにあり、治すことはその一部でしかないことを痛感するこの頃です。島津先生、神戸掖済会病院の設立100周年本当におめでとうございます。「古ければよいというものではありません」と謙遜されますが、本当に良いものしか100年続くことはありません。

会員病院紹介では、理想のマグネットホスピタルの実現を掲げた「北播磨総合医療センター」の充実した診療機能、60年の伝統を持つ大隈病院の地域に密着した医療を読み取ることが出来ます。新しく理事に就任された岩井先生、谷風先生、栗原先生には、本会の発展にご尽力賜りますようよろしくお願いいたします。

価値感が多様になり、何が本当に大切であるのか確信を持つことの難しい時代にあって、「一番大切なものを正面におくように」という30年以上前の恩師の言葉が重みを増してくる毎日です。会報がお手元に届くのは暑い盛りになりますが、皆様のご健康をお祈りいたします。

最後に、ご多忙な中を執筆して下さった皆様、編集の労を執って下さった事務局の方々に心より感謝いたします。

兵庫県病院協会理事・会報編集委員　長嶋　達也
（兵庫県立こども病院　病院長）記